御挨拶

本日は娘、香栄の葬儀に御弔問下さり真にありがとうございます。

娘は1月17日0：30自動車事故で亡くなりました。この日はまさしく阪神淡路大震災のちょうど30年目に当たります。

娘は2011年9月9日医学部六年生だった兄をバイク事故で亡くしました。当時津田塾大の卒業を控えていましたが、兄の遺志を継ぎ、また事故に遭った人を助けたいとの想いで外傷災害医療を志し津田を卒業して二年後医学部に入り直しました。

卒後は自治医大で研修を完了し、将来の外傷医療の為にと自治医大消化器外科に入局し多くの先生方スタッフの方々に助けられ診療に手術に従事し、一昨年からは芳賀日赤、JCHOうつのみや病院で研鑽を積んでいたところでした。ちょうど今月はご指導の下日本内視鏡外科学会誌に論文が上梓されたところです。しかし、これを娘が見ることは叶いませんでした。

そして図らずも娘自身も交通事故による多発外傷で命を落とすことになりました。

ここで長男の遠野物語をお話します。国道246をバイクで走行中、トラックと接触事故を起こし短い生涯を閉じました。『蝉しぐれ　君のいのちはみじかくて』息子の亡骸を引き取ったとき詠んだ俳句です。葬儀も済み、お骨を安置した仏間に、娘と息子の彼女とその妹が3人で川の字になって泊まりました。すると、翌早朝に玄関から仏間までの廊下を勢いよく近づく足音がし、息子の彼女の妹の耳元で「ねね・もも……」と囁いたのです。妹さんはトントントントンと大きな足音が近づいて来て、「ねね・もも……」って聞こえたけれどなんだろうと、二人に話しました。それを聞いて娘は、「それはお兄ちゃんだよ！」と叫んだのです。うちには2匹の犬がいました。ねねとピーチです。ところが息子だけが、「ねね・もも」と呼んでいたのです。

まさしく家族しか知らないことを第三者に伝えることで、肉体の無くなった自分がぴちぴちと存在している証を示してくれました。

この体験を通し、死とは機能しなくなった肉体を脱ぎ捨てることであり、魂はどこかで存在し続けると確信し私の悲しみは癒されました。現代医学において「患者を救えない！」とは医療者にとっての敗北そのものでありましょうが、カール・ベッカー氏の提唱するクオリティー・オブ・デス（死の質）において、永遠の魂を認識することが敗北からの脱却を意味すると考えました。

昨年一般医学雑誌『統合医療でがんに克つ』10月号に原稿を上梓しました（別紙）。その中でのとても不思議な体験です。量子理論で診断・治療するNLS機器を日々自由診療で用いていますが、現在再確認すると三年前の診断結果が変化していたのです。三年前に日本統合医療学会栃木支部での講演でも発表していますから元のデータは第三者的に明らかですが、現在（未来）で行われた観測により過去のデータが改変されて、貧血と子宮頸部びらんが改善していたのです。

そこで量子理論に関する論文を検索すると2023年10月に『量子もつれ（エンタングルメント）』に関する論文がケンブリッジ大学物理学教室から発表されていました。それは「量子もつれ理論により未来で行われる観測により過去の観測結果もそれに呼応して曲げられる」という信じ難い内容でした。

この事実をさらに確かめるため膵臓癌と乳がんの症例の過去のデータを再確認すると二例とも過去のがんの周波数が変化いていたのです。事実現在二人ともがんはほぼ完治しております。

ここで娘がなぜ1月17日に命を落としたのかその意味を考えました。娘は災害外傷の患者さんを救いたい思いを強く持っていました。娘の魂は6400余名が亡くなった阪神淡路大震災の被災者の外傷の治療に当たる為、時間軸における量子のもつれを通してピタリ30年前にタイムリープしたのではないかと。

そう考えることで私の悲みは癒され娘の背中を押す思いに切り替えることが出来ました。

『この世にて　なすべきことを　成し遂げし　新たな霊智（みち）を　君は進まむ』

来たる3月6日が四九日ですが、娘の36歳の誕生日にあたります。

合掌

令和七年一月二十七日

香栄の父　藤沼秀光